『万葉集』から見る日本の古典 12

獨協大学特任教授　城﨑　陽子

浦島太郎　その3

先回は『続日本後紀』嘉祥二年（八四九）の仁明天皇四十の賀に、興福寺の僧等が「浦嶋子」が天の川をさかのぼって、長生する様を象った像を造りこれを奉献した記事を扱った。今回は、この「浦嶋子」が文学史の中で様々な文学作品に取り上げられ、どのように扱われているかを概観してみたい。なお、読み易さを考え、適宜仮名を漢字に改めたり、句読点をほどこしたりした。

まず取り上げる『後撰和歌集』には、三十六歌仙の一人でもある女流歌人中務の歌に浦島を引き合いに出した作品がある。

元長の親王の住み侍ける時、手まさぐりに、何入れて侍ける箱にかありけん、下帯して結ひて、又こむ時に開けむとて、物のかみにさし置きて、出で侍けるのち、常明の親王に取り隠されて、月日久しく侍て、ありし家に帰りて、この箱を元長の親王に送るとて

あけてだに何にかはせむ水の江の浦島の子を思ひやりつゝ

（雑一・一〇四番）

元長皇子が中務のもとに通っていたころ、紐をかけて結わえたままの箱を「また来た時に開けよう」といって、物の上に置いて帰った。その後、中務は常明皇子との関係ができて元長皇子との仲は途絶えてしまう。年月がたち、中務がかつての家に帰ってその箱に気付き、この箱を返すという時に、「いまさら箱を開けて何のために中を見ましょうか、『水の江の浦島の子』のように、思いがけないほどの時間が経ったことを辛く思います」と二人の関係が元には戻らないことを「浦島の子」を引き合いに出して詠むのである。

次に『源氏物語』をみてみよう。「夕霧」の巻に「浦嶋の子」が引き合いに出されるシーンがある。

人々は、皆いそぎ立ちて、おのおの、櫛、手箱、唐櫃、よろづの物を、はかばかしからぬ袋やうの物なれど、皆先だてて運びたれば、一人止まり給べうもあらで、泣く泣く御車に乗り給も、傍らのみまもられたまて、こち渡りたまうし時、御心地の苦しきにも、御髪かき撫でつくろひ、おろしたてまつり給しを思し出づるに、目も霧りていみじ。御佩刀に添へて経箱を添へたるが、御傍らも離れねば、

恋しさの慰めがたき形見にて涙にくもる玉の箱かな

黒きもまだしあへさせ給はず、かの手ならし給へりし螺鈿の箱なりけり。誦経にせさせ給しを、形見にとどめたまへるなりけり。浦島の子が心地なむ。

宇良神社に奉納された亀のつくりもの

柏木の未亡人である落葉宮は病気の母・一条御息所とともに、小野の山荘に居たが、御息所が急死したことを契機に一条宮に連れていかれるのであった。落葉宮は乗せられた車の中で傍らに置かれた母の形見の螺鈿の

経箱をみて歌を詠む。その後に「浦島の子が心地なむ」と記されていることから、「形見の箱」は浦島の「玉手箱」に、その時の落葉宮の心持を、箱を抱えて故郷へ帰る浦嶋の子の気持ちに擬えたものと考えられる。

十世紀後半の和歌にも、十一世紀はじめに書かれた物語にも登場する「浦嶋子」の物語は、十二世紀はじめの歌学書にも登場する。源俊頼の『俊頼髄脳』がそれである。

みづの江の浦島の子が箱なれやはかなく開けて悔しかるらむ

これはみづの江の浦島の子といへる人のありけるなり。みづの江の浦島とは所の名なり。大きなる亀を釣りいでて置きたりけるに、浦島の子が寝たりけるに女になりて居りけるを見て、妻にしてありけるに、女、「いざ給へ、我が住む所へ」と誘ひければ、釣りしける船に乗りて、えも知らぬ所にいきて住みければ、まことに楽しく、思ふ事もなかりけり。しかはあれど古き都の恋しかりければ、「我ありし所へ帰しやり給へ、あからさまに行きて、また帰り参らむ」とあながちに言ひければ、「しか、さ覚えさばはや帰り給へ」とて返しける時に、小さき箱を結ひ封じて取らすとて、「この箱を形見に見給へ。あなかしこ、あけ給ふな」と、返すがへす言ひ語らひて取らせつ。その箱を取りて、船に乗りて帰りぬ。もとの所へ帰り着きけるままに、いつしかとゆかしかりければ、みそかにと思ひて、何の入りたるぞと思ひて、おづおづ細めにあけて見れば、けぶり出でて空にのぼりぬ。其の後老いかがまりて、物もおぼえずなりぬ。はや、この人のよはひを籠めたりけるなり。あけける事をくやしと思へどかひなし。それが心を得て詠めるなり。

『俊頼髄脳』は源俊頼が高陽院泰子の后がね（皇后教育）のために書いた歌学書である。頭書の和歌の解説として書かれた「浦島の子」の物語であるが、箱の中に「よはひ（年齢）」が籠められていたとする件は俊頼の解釈であろう。

さらに十三世紀はじめの鴨長明の『無明抄』には、「浦島の翁」が神として祀られることを記した次の文章がある。

丹後の国与謝の郡に、あさも川の明神と申す神います。国の守の神拝とかいふ事にも、御幣などえ給ひて、祀らる程の神にてぞおはすなる。是は、昔の浦島の翁の神となれるとなむ言ひ伝へたる。物騒がしく箱開けし程の心に、神と跡を留給へるは、さるべき権者などにてや有りけん。

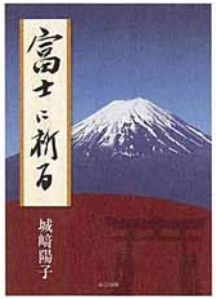
「あさも川の明神」とは、現在の京都府京丹後市にある網野神社のことをいう。「浦島の翁」が神として祀られることについて長明は、慌ただしく箱を開けてしまうような翁を神として祀るのは、浦島の子が由緒ある仏や菩薩の化身であったからだろうという。

「浦島子」は、様々に解釈されながら文学作品に取り込まれ、とうとう神に祀られるといった状況にまで至る。そして、御伽草子に取り込まれることで広く喧伝される「お話」になるのであるが、このことについては、次回とする。

書籍紹介

このたび、獨協大学特任教授の城﨑陽子先生が、平成二十二年六月号から平成二十八年十二月号に渡り、高尾山報に連載していた、『富士に祈る』を加筆編纂して、出版しました。

この本では、富士信仰の成立や、現代まで継承されている富士修験道の行事、富士信仰の歴史的展開等がわかりやすく記述されています。



富士に祈る

城﨑陽子　著

㈱ふこく出版

TEL 042-649-6490

1,900円（税別）